

「フジモリ」

和気中学校 藤森卓麻



弾痕の残る旧大使公邸

そろそろ赴任先が決まる頃、我が家でも他の家庭と同じであろう会話が日常であった。いったい「どの国」に派遣されるかということである。

「どこになるんかなあ。」「割合でいうとアジアかなあ。」「どこでもいいけど、まァペルーはないじゃろうな。」当時ペルーのフジモリ元大統領は国際手配中で、ペルーの日本大使館前でも大規模なデモが繰り返されていた。ペルーで一番有名な日本の姓はおそらく「フジモリ」だろうし、それは決して良い意味ではないことも楽に想像できた。それから数日後、我々の赴任先はペルーだと知らされた。

我々の想像は現実となった。ペルーに赴任してきてまもなく、大使館にご挨拶にうかがった。大使に「名前が名前なので十分気をつけてください。」と真顔で言われた。何を気をつければいいんだろう...？とりあえず「フジモリ」と名のるのをやめた。「タクマ」で通そうとした。でも、市場をフラフラしていたりすると、すれ違い際に「フジモリ！」と小声で言うのが聞こえてくる。「やばい、バレてる！」両親がやってきたときも、父はビビっていた。「みんなに名前がバレてる！」今思えば親子そろっておバカさんである。さらに、銀行に行けば行員がお隣同士で、「フジモリよ！」とささやく。空港に行けば、入り口で警官に、チェックインで空港職員に、税関では検査員に、あらゆる人からリアクションがある。

面倒なわりに効果がないので「フジモリ」を隠すのをやめた。なんだか楽しくなった。危険な目に遭うどころか、「フジモリ」という名前だけでつかみはOK！おまけにクスコなどでは、タクシーの運転手さんや、人形師のおじいちゃんなどからも熱烈大歓迎を受けた。それから、いろいろな人とつながることができた。このたくさんの人との出会いがペルーでの一番の財産になった。「親戚なんでしょ？」「彼はいつ帰ってくるの？」という、前はいちいち説明するのがうっとうしかった質問にも、平気で答えられるようになった。「おじさんは元気だよ。」



校庭で 中3の生徒達と

この名前のおかげでペルーに派遣された（と確信している）。学校では、生徒と本気で向き合いながら、充実して仕事をすることができた。今までの自分のスタイルに自信も持てたし、新しいものもを見つけることができた。今では名前にも感謝、感謝である。また帰りたと思う場所が一つ増えた。今度帰ったとき、空港ではまた大きなリアクションがあるのだろうか。なかったらきっと寂しいなと思いながら、現在は新しい生徒達と毎日向き合いながら、同じく充実した生活を送っている。